脱施設化ガイドライン案への世界のコメント（2022年6月）　No.101

ソフィア[[1]](#footnote-1)（ブルガリア）

文書提出

Written Submission　From Sofia

この声明は、ブルガリアに拠点を置くNGO、自立的専門家ネットワーク（Network of Independent Experts – NIE）に文書として提供されたものです。これは、ヴァリディティ財団（Validity Foundation）の支援を受け、NIEが翻訳したものです。この声明には、編集上の変更（翻訳した以外は）はされていません。

黄金の檻（Golden Cages）

私はソフィアです。ソフィアという街で生まれました。両親は私を育ててくれましたが、私が7、8歳の時に他界し、私はルコビトの社会福祉施設に預けられました。そこで初等教育を受け、卒業しました。その施設の生活環境は良かったのですが、私たち子どもは黄金の檻の中で生活しているような感覚を持ちました。自分たちで自由に選択することができず、職員の誰かが一緒にいないと街を散歩することも許されず、実際、必要なとき以外は外に出ることはありませんでした。ホームはダウンタウンから遠く離れていました。ホームの職員以外の市民には、私たちの存在は知られていませんでした。ホームには、さまざまな障害のある子どもがいました。精神障害（mental disabilities）のある子どもがいて、彼らと同じ日課に従うことが強いられました。食事も睡眠も散歩も。これらはホームの敷地の中でしかできませんでした。服や靴下は制服（generic sets）が支給されました。私たちは5、6人で1つの部屋で生活していました。もう1つ同じような部屋があり、バスルーム1つで、そこと共有でした。特に休みの日には、お客さんが来ることもありました。彼らは私たちにたくさんのプレゼントを持ってきてくれましたが、翌日にはホームの職員や身体の大きな子どもたちに取られて、すぐに消えてしまいました。ホームの職員や大きな子どもたちが、小さな子どもたちを殴ることは容認されていました。完全にコントロールされていました！「今すぐ寝ないと叩くぞ！」「夕食の時間は終わりだ！時間通りに来なければだめだ！」。これらは、ホームで見られることのほんの一部です。お風呂の時間もみんなで一緒でしたし、ある特定の日（日曜日）でした。私たちが年長になると、一人でお風呂に入ることを許されましたが、やはり日曜日でした。全体として、ホームはすべての子どもや若者にとって残酷な虐待であると言えます。私はヴァルナホームでも暮らしたことがありますが、もっとひどかったです。体調が悪かったので、ルコビトに戻されました。2010年、私は同じ町の安心住宅（Secure Housing）に移されました。そこはダウンタウンに位置しています。日常生活はかなりフレキシブルになりましたが、それでも、何をすべきかを決める職員はいます。ホームにいた頃と100パーセント同じというわけではありませんが、昔ながらのやり方はまだたくさんあります。まず断りなく敷地から出ることはできません。友だちが遊びに来たり、泊まりに来たりするのも禁止されています。このような施設では、さまざまな障害のある人々が混在していること、そして、そこで無教養で冷淡な人々を雇っているという事実がいやです。古い固定観念を使い慣れたマネージャーを雇っています。私は、彼らが私たちを助けるのではなく、私たち自身を向上させることの邪魔をするという事実が好きではありません。彼らは私が何をするか、それを誰とするのかを追跡しているのです。私たちが人間であることを傷つけるこのような機関は存在してはならないのです。そこでは私たちは劣化した人間に変わってゆきます。私たちは（訳注　そのようなところで暮らしていると）普通の生活を送ろうという意志を持ちません。新しい技術や知識を得る代わりに、攻撃性や恐怖心を身につけ、それが私たちの権利のために戦うことを妨げているのです! この条約ができるだけ多くの人々の支持を得て、私たちの愛する祖国を含むすべての国で発効されるなら、私はとてもうれしいです！

注： この投稿で示された見解はソフィアのものであり、ソフィアが協議プロセスに参加することを可能にした団体の意見を必ずしも反映するものではありません。

（翻訳： 佐藤久夫、岡本明）

1. 著者は障害のある人である。彼女はファーストネームだけを使うことを申し入れている。 [↑](#footnote-ref-1)